

Ⅲ-5 仙台教育事務所『授業づくりポイント8』

中教審答申（令和3年1月）において、授業づくりに当たっては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要であるとされています。各学校では、本答申を受け、日々子供たちのために授業改善を図り、教育活動を展開されていることと思います。

「授業づくりのポイント8」は、上記を受け、教育の不易と流行の部分も加味しながら、現場の先生方の授業づくりの一助となるように、従来の「授業づくりポイント10」を改めて8つの項目でまとめたものです。学校は、新たに教職に就いた先生から、指導的な立場の先生まで、様々なライフステージの先生方で構成されています。それぞれの経験年数に応じて活用ください。

□：各項目のキーワード

1 学級づくり

- | | |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| ☐ 安心・安全な学級 | ☐ 一人一人が活躍できる授業 |
| ☐ 互いが認め合える授業 | ☐ 失敗が許される雰囲気 |

2 学習習慣の確立

- | | |
|---|---|
| ☐ 学習前の準備・始業時刻の順守 | ☐ 始業・終業の挨拶、授業の見通し |
| ☐ 用具・道具の後片付け | ☐ 家庭学習への主体的・計画的な取組、翌日の準備 |

3 教材・教具

- | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| ☐ 教科書は中心的な教材 | ☐ 子供の実態を踏まえた活用 |
| ☐ ねらいと使用目的の整合性 | |

4 課題・ねらい

- | | |
|---|---|
| ☐ 子供の気付きや感想を生かす | ☐ 学習の道筋とゴールへの見通し |
| ☐ 子供にとって分かりやすい表現 | |

5 指導方法・学習形態

- | | |
|--|---|
| ☐ 単元・単位時間の授業のねらいの達成 | ☐ 学習内容に応じた効果的な学習形態 |
| ☐ 子供自身による学ぶ形態の選択 | ☐ 多様な学び方の提示 |

6 発問

- | | |
|---|---------------------------------------|
| ☐ 興味・関心の向上と学習意欲の喚起 | ☐ 導き出した根拠の問い返し |
| ☐ 学習内容の整理、価値付け | ☐ 次時への意欲の継続・喚起 |

7 板書

- | | |
|---|----------------------------------|
| ☐ 分かる授業のための教具の一つ | ☐ 使う効果と場面 |
| ☐ 他の教具とのバランス | |

8 評価

- | | |
|-------------------------------------|------------------------------------|
| ☐ 子供の実態把握 | ☐ 指導方法の振り返り |
| ☐ 単元の目標との整合性 | |

『授業づくりポイント8』は、以下の資料を基に、令和5年度末に新たに内容を再構成しました。今後もその時の教育事情に合わせて、更新していく予定です。

【参考にした資料】

- ・「授業作り10のヒント」H14 仙台教育事務所
- ・「授業づくりポイント10」H21 仙台教育事務所管内研究主任研修会

①学級づくりについてのポイント

授業づくりにおいて基盤となるのは学級経営、すなわち学級づくりです。学級づくりは、「子供一人一人が『学び合い』を通して成長していく場を、担任が子供と共によりよくつくりあげること」ということができます。学級の子供たちが一日の学校生活で最も長い時間を共に過ごすのが授業です。集団で学ぶ特性を生かして、互いに認め合い、共に学ぶよさを感じさせることが大切です。また、子供が授業に意欲的に打ち込めるようにするためには、子供と担任の信頼関係、子供同士の人間関係を豊かにし、安心して学校生活を送ることができる学級をつくる必要があります。

『学級づくりに必要なこと』

□安心・安全な学級

子供にとって自分の居場所である学級を心地よく安心できる場にするのが大切です。

□子供と担任の信頼関係

担任は子供一人一人について理解し、子供が担任に対して安心して話ができるような信頼関係を築くとともに、子供が努力したことを具体的にほめ、認めることで目標に向かって努力する気持ちを育てることが大切です。

□子供相互の温かい人間関係

子供一人一人が互いを尊重し、お互いの考えを認め合い、思いやりを持って行動できる集団をつくること、このことが、授業における「まちがいをおそれることなく、発言できる雰囲気づくり」に結び付きます。

□基本的な生活習慣の確立

挨拶や言葉遣い、身の回りの整理整頓など基本的な生活習慣を確立させることは、学級内に温かい雰囲気を生んだり、学習意欲を高めたりする上でも効果が期待できます。

□学習習慣の確立 ……… 「②学習習慣の確立に向けたポイント」 参照

学習習慣が確立していないために、授業が成立しないことがあります。その結果、多くの子供が学習に集中できず、学習内容の定着に影響を及ぼす場合も考えられることから、学級において「よりよい学習習慣を身に付けさせること」は、子供の規範意識を育むことに結び付きます。

よい教材を用いて丁寧に指導しても、学級づくりができていなければ学習の効果は上がりません。児童生徒同士の共感的な人間関係を育てることで「一人一人が活躍できる授業」「互いが認め合える授業」「失敗が許される雰囲気」をつくるのがポイントです。

②学習習慣の確立に向けたポイント

主体的で対話的で深い学びの実現に向けて、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が求められています。

子供一人一人が、自立した学習者として主体的に学びに向かい、多様な他者と関わり合いながら協働的な学びを展開していくことができるように、学びに向かう力を身に付けさせなければなりません。

そのために、低学年からよりよい学習習慣を身に付けさせ、ICT も有効に活用しながら、様々な学び方を経験させていく必要があります。

各学校では、子供の学びに向かう基礎・基本や家庭学習への取り組み方等を示した「学びのためのスタンダード」等が作成され、日々の教育活動で活用されてきました。下の表は、よりよい学習習慣の一例を示したものです。各学校の学習の手引き等と併せて指導の参考としてください。

授業前

□学習の準備

- ・休み時間のうちに教科書、ノート、筆記用具、1人1台端末など、授業に必要な物を準備する。

□始業時刻を守る

- ・チャイムや時計を意識して着席し、次の学習への目標を持つ。

授業中

□始業、終業の挨拶

- ・授業の始まりと終わりはきちんと挨拶をし、気持ちの切り替えをする。

□授業への取り組み方

- ・適切な言葉で語尾まではっきり話す。
- ・発言するときは、相手に伝わるように意識して話す。
- ・根拠をもって話すように心掛ける。（特に、小5・6年、中1～3年）
- ・話し手の意見を理解しようと意識して聞き、分からないときは質問する。
- ・自分の考えと異なった考えについても受け入れる。
- ・グループ活動ではリーダーを中心に積極的に話合いや活動に取り組む。

授業後

□用具・道具の後片付け

- ・授業中に使用した物を、元の場所にきちんと片付ける。

□宿題や家庭学習への取組、翌日の学習準備

- ・起床時刻、学習を始める時刻、就寝時刻を定めるなど、生活リズムを整えながら家庭学習の時間を確保するとともに、自分自身で課題を設定したり、ICT を効果的に活用したりするなど、家庭学習の質を高められるようにする。また、家庭や学校で読書の時間を設定するなど、読書に親しむ機会の充実を図る。

学習習慣を身に付けさせるためには…

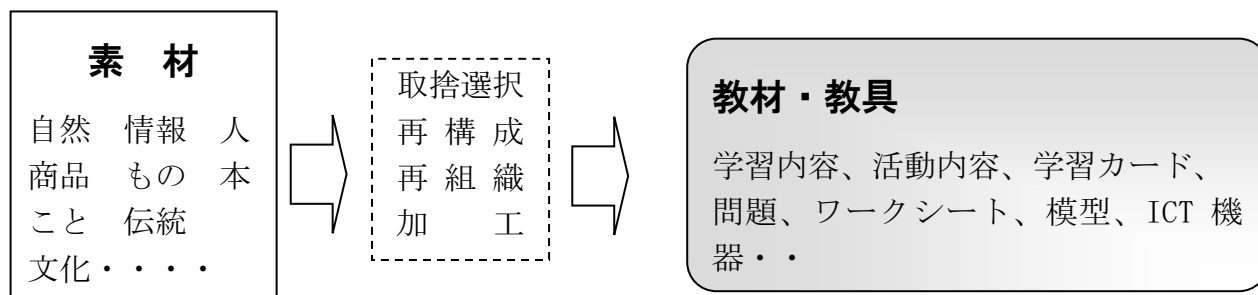
決められたルールを守るだけでなく、子供自身がルールの必要性を理解し、自分たちでつくってみることも大切です。

また、教師自身が留意する点もあります。例えば、子供たちに、授業前に教室へ戻るというきまりを守らせるのであれば、教師は必ず開始時刻と同時に授業を始めるように心掛けなければなりません。つまり、教師側の姿勢も必要です。また、このような取組を全校で実践することが子供たちの意識を高め、学習する集団の基盤づくりの一つとなります。

③教材・教具についてのポイント

用語として「教材」「教具」の定義はそれぞれなされていますが、定義が重なる部分もあるので、「教材・教具」として使われることが多い用語です。「教材・教具」とまとめて用いる場合と、教育目的を達成するための材料（内容）を「教材」とし、教材を効果的に子供に指導するために用いる道具を「教具」として区別する場合があります。学習者の最適な学びを支援するため、学習用デジタル教科書やデジタル教材を活用することとそのメリットやデメリットについても把握しておくことが大切です。

・教科書は、教科を教える中心的な教材です。身の回りにある素材も教材・教具になります。



こうした教材・教具の活用にあたっては、次のような留意点を踏まえて計画することも大切です。

留意点①・教材・教具を活用する前に

- 学習のねらいを達成させる上で、適切か。
- 子供の実態、ニーズに合っているか。
- 興味・関心を引くものになっているか。
- 日常生活、地域との関連があるか。
- 学習指導要領や年間指導計画との関連はどうか。

留意点②・授業を構成するときはなぜ

何を理解、発見させるための教材・教具なのか、目的をしっかりと把握しておく。

どのように

教材・教具を単元、あるいは授業の「どこで」「どのように」使うのかを明確にしておく。

* 自作教材は、深い教材研究と子供に関するしっかりとした実態把握などを基に作成する。市販、既存の教材・教具だけでなく、教材・教具を、自作、開発していくことも大切です。

* タブレット端末等の ICT 機器は、指導者自身がその活用方法に習熟することが必要ですが、授業のねらいを十分に踏まえて活用することが重要です。また、情報活用能力の育成とともに発達段階に応じて情報モラルの必要性や情報に対する責任についても身に付けさせていくことが大切です。

* 観察・実験や実技を伴う授業には思わぬ事故につながるリスクが潜んでいます。予備実験や危険個所の確認、使用する器具や用具の点検等を行うとともに子供たちの安全に対する意識を高める必要があります。

④課題・ねらいについてのポイント

課題とは、「単元（題材）や1時間の授業において、子供が『その単元（題材）やその時間で何をするのか』を具体的に確かむことができるものです。また、ねらいとは、学習指導要領の各教科等の目標及び内容と、子供の実態を基に設定した単元（題材）や単位時間の教師の指導目標である。」と捉えることができます。

各教科等の「ねらい」を踏まえて、子供が意欲的に授業に参加することができるようにするためには、子供にとって具体的で、追究意欲が高まり持続できる「課題」を設定することが大切です。

『課題の設定に当たって』

□授業のねらいを押さえる。

- ・単元（題材）や単位時間で子供に身に付けさせたい力を具体的に設定する。
- ・各教科等の評価規準とのつながりを明確にする。

□子供の気付きや感想を生かす。

- ・「なぜ、……なのだろう。」「……をやってみたい。」と、課題に結び付くような問題意識を持たせ、必要感や興味・関心を高める。

→問題意識を持たせるために

（例）◆子供の生活体験や経験と結び付ける。

◆これまでの学習との比較をする。

◆実物を提示する。 など

□学習の道筋とゴールが見通せるものとする。

- ・子供が「何を学ぶか（内容）」「どのように学ぶか（方法）」追究し、解決していくのか、または、取り組んでいくのかを分かるように示す。
- ・子供自身が「何ができるようになるか」を分かるように示す。

□子供の実態に応じた具体的な表現をする。

- ・子供の実態を把握する。
- ・子供にとって分かりやすい言葉や表現を用いる。

※課題の設定は、体験などの活動の中で行うことが効果的な場合もあります。

ねらいからまとめ・振り返りまでの整合性を図り、子供が何をどのように学ぶのかを明確にした授業を設計するよう心掛けましょう。

⑤指導方法・学習形態についてのポイント

指導方法とは、「授業のねらいを達成させるために、子供の興味・関心や理解度、これまでの学習の取組、学級集団のよさなどの様々な実態を考慮した、子供のために講じる最も効果的な手立て」です。単元の目標、あるいは本時の目標の達成に向けて、子供と教材のつながりを意識しながら、子供や学校の実態を基に指導方法や学習形態を構想します。その際、個別最適な学び、協働的な学び、ICTの活用、評価等について、具体的にイメージしながら指導方法や学習形態を決めたり、子供に選択させたりすることが大切です。

『子供の学び方の一例』

【指導方法は？】

☐ 教科書やノートで ☐ ICTを活用し ☐ 本や図鑑などで ☐ インターネットで	授業のねらいに応じて、様々な学び方を取り入れましょう。子供が様々な学び方を知り、経験することで、見通しを持って学習に取り組んだり、学びを自己調整したりすることができるようになります。子供自身に選択させることも有効です。
--	---

【学習形態は？】

☐ 一斉指導で ☐ ペアやグループで ☐ 個別で	授業のねらいを達成させるために、それぞれのよさを生かした効果的な形態にします。学ぶ形態を子供自身に選択させることも大切です。
---	--

【小集団の際は？】

☐ 学習内容で ☐ 人数で ☐ 追究方法で 等	小集団の学習形態では、より主体的な学習への展開が期待されます。実験、話し合い、討論、共同での作業、調べ学習など、学習内容に応じて効果的な学習形態を考えていきます。
--	---

【指導方法や指導体制は？】

☐ 日常の授業で ☐ 発展的な学習で ☐ 補充的な学習で ☐ 課題学習で	単元全体を見通して、学習内容の理解を一層深め広げる学習やフィードバックして繰り返し取り組む学習、つまづきに応じた学習、児童の興味・関心等に応じた課題学習などが必要です。個別最適な学びや協働的な学びを取り入れ、深い学びにつなげましょう。
---	---

私たち教師は、日々、授業の工夫・改善に取り組んでいます。大切なことは、形態や型が先行し過ぎるのではなく、子供の学力・学習状況や学習のねらい、子供の思考の流れなど、単元全体を見通した子供への指導方法を考えていくことです。

この内容はどのように学ばせるか、ここでは子供に学びを委ね教師はどう支援に当たるかなど、事前の教材研究がより大切になってきます。

⑥発問についてのポイント

発問とは、「学習の対象に出合ったときに、子供が持つ多様な考えや思いをよりよいものにしていくための、学習の目標やねらいに照らして行う教師の問い掛けです。発問は、子供の実態や反応を見ながら行うことが大切です。子供がどのように答えるのか、反応するのかを予想し、授業の各段階において計画的に行うことが必要です。

【授業の各段階における発問の考え方の例】

つかむ

○「つかむ」段階では、子供が生活経験や既習事項を想起しながら、学習内容に対する興味・関心を高めることができるような発問をします。また、子供が疑問に思ったことや発見したことを全体に問うことも大切です。

調べる 練り合う

○「調べる」段階では、追究や解決の見通しを持たせる発問が必要です。予想させたり、追究や解決の方法を問い掛けたりしながら、学習を主体的に進めていこうとする意欲を高めていきます。

○「練り合う」段階では、調べた結果や結論を問います。結果や結論を導き出した根拠を子供へ問い返ししながら、それぞれの結果や結論の共通点や相違点などを確認し、学級全体で考えを深めたり、広げたりできるような発問も大切です。

まとめる

○「まとめる」段階では、学習したことを整理し、まとめることができる発問をします。さらに、子供が新たな課題に気付いたり、次時の学習への関心を高めたりするような発問も大切です。

教師の大切な役割は、子供たちの発言を丁寧に取り上げ、その発言と発言をつなげることや、子供の考えを深めたり、広めたりすることです。学習の目標やねらいを達成するために発問を考える際には、子供の実態把握と教材研究の深さが必要になります。

さらに、次のことにも留意しましょう。

- ・教師の話し方（声の大きさ、抑揚、間の取り方、簡潔ではっきりした言葉）
- ・教師の表情（視線、笑顔） ・意図的指名（学習のねらいに即して）
- ・発問を糸口とした子供相互のやりとり

子供は、教師が気付かないようなすばらしい考えやアイデアをたくさん持っています。それをいかに導き出すかは、私たち教師の発問にかかっています。発問を吟味し、説明や確認が長くならないように留意しましょう。

⑦板書についてのポイント

これまで板書は、学習の内容を構造化して示すことで、子供の思考活動を盛んにし、考えたことをまとめて可視化する優れたツールとして用いられてきました。GIGA スクール構想の下、学校現場にタブレット端末や電子黒板等の ICT 機器が導入され板書の役割も変化してきています。授業者には、板書を一つの教具として役割を意識し、授業の中で効果的に活用することが求められています。

『板書の効果と場面』

□「板書で動機付けする」（導入）

- ・課題を書き、ねらいを意識させる。
- ・場面絵や関係を示すなど共通の学習場面を明示する。

□「板書で考えさせる」（展開）

- ・子供の多様な考えを引き出す。
- ・黒板で、互いの考えを比較検討させる。
- ・考えを検討し合った過程を大切に記録する。
- ・資料等は思考を助けるために用いる。

□「板書でまとめる」（終末）

- ・課題に対するまとめを行うことによって、子供の思考をまとめる。
- ・まとめることで、学習内容が整理され、学習の満足感・達成感が高まり、次の学習への意欲を高めていく。

～ねらいの達成に向けて～

板書のよさは、導入時に示した課題を終末まで残しておくことができることと子供の考えをすぐに反映させることができることにあります。

板書の特性を理解し、ねらいの達成に向けて、電子黒板、ノート、ワークシート、タブレット端末、掲示物等のそれぞれの役割を明確にして活用するように留意しましょう。

『板書と学習の記録』

□学習の記録方法を検討する

下記のような場面で、板書で示した内容と、ノート、ワークシート、タブレット端末等との関連を図る。

- ・課題を書く。
- ・自分の考えを書く。（理由や根拠）
- ・まとめを書く。
- ・振り返りをする。（学習感想や自己評価等）

※タブレット端末が導入されたことにより、学習の記録をクラウド上に蓄積できるようになりました。学習履歴（スタディ・ログ）は子供が学習を振り返るときにも役立ちます。

⑧評価についてのポイント

評価は、子供に学習内容が確実に身に付いているかを適切に判断したり、私たち教師が日々の教育活動を反省し改善したりすることなどの目的があります。特に、「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹であると言われています。「学習評価」においては、単元の学習前後、1 単位時間の授業の前後及び授業中など、適時に子供の実態を評価し、指導に生かしたり、指導を改善したりすることが大切です。

『子供の成長と変容を見取る評価を充実させるために』

授業前に行う評価の例 ～診断的評価～

□単元のねらいを確認し、単元の評価規準を設定する

- ・各教科・領域等のねらいを基に、単元（題材）及び各時間で目指す子供の姿を具体的に設定する。
- ・実態把握を行う。

学級全体だけでなく、個々の子供にも焦点を当てた実態把握をすることが大切です。ICT の活用も有効です。実態の把握には次のような方法等が考えられます。

- レディネステスト ○意識調査 ○教師による見取り ○適用問題
- 各種学力調査の結果 ○スタディ・ログ

- ・評価場面や到達できたかどうかを見取ることができる具体的な方法等を検討し、指導と評価の計画を作成する。
- ・教科の特性に応じて、単元の中に「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」を位置付ける。
- ・1 単位時間の評価項目は、1 ～ 2 つに絞る。

「学習の過程を大切にした評価」

子供の活動の記録を累積したり、変容を見取ったりするために、補助簿や座席表を活用することも一つの方法です。

授業中に行う評価の例 ～形成的評価～

□授業者の観察評価

- ・全体での発表内容
- ・ペアやトリオ、グループでの発言内容
- ・机間指導の際の個々のつぶやき、発言内容
- ・子供の表情など、表出したもの

□ノート等の子供の思考や表現が記録された内容による評価

- ・ノートやクラウド上に蓄積された、子供の思考や表現等が記録された内容による評価

※教師は「指導に生かす評価」を行い、子供が学習内容を理解していないと評価した場合、フィードバックをしたり、復習したりするなど指導法を改善することで、着実に学習内容が身に付けられるようにします。

単元の「記録に残す評価」を行う場面では、単元の評価規準を基に、子供の達成状況を見取ります。「記録に残す場面」を精選することが大切です。

授業後に行う評価の例 ～総括的評価～

□作品による評価

- ・作文や絵画等の作品について、観点を基によさを捉えた評価

□記述による評価

- ・ねらいに即した振り返り、適用問題などによる評価

□面接による評価

- ・記述や作品等では表現されない部分について聞き取る評価

※「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究教育課程研究センター）を参考にすること。